論　説

総合的な学習の時間と特別活動の関連に関する一考察

大庭　正美*

＜要　旨＞

今回の学習指導要領改訂のキーワードの一つにカリキュラム・マネジメントがある。その中核的な役割を総合的な学習の時間が担うと明示された。創設以来 20 年が経つ総合的な学習の時間の実践課題を踏まえ、あらためて生徒が主体的に取り組む学習とするための指導の改善が求められている。本稿では、カリキュラム・マネジメントの考えを踏まえ、具体的な実践事例を基に、特別活動との関連を中心に考えていくこととする。主に学校行事やキャリア教育との関連について考察･評価しながら、さらなる充実に向けての考え方や指導の工夫についても提案する。生徒にとって意味のある総合的な学習の時間を生み出すには、その基盤としての特別活動の充実が欠かせない。教育課程全体の力を高め、将来「予測が困難な時代」を生きる生徒に必要な資質能力を育成する上で、総合的な学習の時間と特別活動との関連は今後も一層重視すべきと考える。

キーワード：カリキュラム・マネジメント、キャリア教育、勤労生産・奉仕的行事、起業家教育（アントレプレナーシップ）、生徒会活動

○はじめに

学習指導要領が改訂（平成 29 年 7 月告示）された。今回の改訂では、今の子供たちが成人になって活躍する頃を「予測が困難な時代」であるとし、そんな時代にあって「子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすること」[1] が学校教育に求められているとし、改訂のキーワードとして、

・育成を目指す資質・能力の明確化
・「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進
・各学校におけるカリキュラム・マネジメントの推進
・社会に開かれた教育課程

が挙げられている。

この中の、各学校におけるカリキュラム・マネジメントの推進に関しては、改訂の基本方針の中に、「学習の基盤となる資質・能力（言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等）や現代的な諸課題に対応して求められる資質･能力（情報モラルを含む。以下同じ。）の育成のためには、教科横断的な学習を充実することや、『主体的・対話的で深い学び』の充実に向けた授業改善を、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して行うことが求められる。」とあり、その実現のために「教育活動の質を向上させ、学習の効果の最大化を図るカリキュラム・マネジメントに努めることが求められる。」と明記されている。[2]

今回の学習指導要領ではカリキュラム・マネジメントが重視されているため、教科横断的な活動である総合的な学習の時間が果たすべき役割を明確にした上で、特別活動との関連を含めて構造的に理論化する。

その上で、本稿では実際に行われた中学校での授業モデルを素材に総合的な学習の時間の可能性について検討したい。

分析対象とするのは北九州市立 Y 中学校第 3 学年の単元「う米売（うまいばい）プロジェクト」である。この実践研究は平成 29 年度から北九州市教育委員会の委嘱（3 年間）を受け、令和元年度に授業公開と共に研究成果が公表されている。[3]

＊　西南女学院大学保健福祉学部看護学科　非常勤講師

1　学習指導要領改訂が示す方向

(1) 総合的な学習の時間の改訂の要点

総合的な学習の時間の改訂の基本的な考え方として、中学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編の中で「探究的な学習を一層重視し、各教科等で育成する資質・能力を相互に関連付け、実社会・実生活において活用できるものとする」とあり、教科等横断的なカリキュラム・マネジメントの軸となるよう、目標の設定に当たっては学校の教育目標を踏まえて設定することが示されている。[4)]

これまでの学習指導要領においても、教育課程における総合的な学習の時間の位置付けを明確にすることが示されてきたが、今回の改訂では、「これまで以上に総合的な学習の時間を教育課程の中核に位置付ける」というように強く明記されている。[5)]

総合的な学習の時間を教育課程の中核に据え、学校教育目標の実現に直結する位置付けにすることは、今回の学習指導要領の特色の一つであり、カリキュラム・マネジメントを重視する考えと連動するものである。

ただし、総合的な学習の時間は創設当初より名称のごとく各教科等での学びを総合的に発揮し、教科横断的なテーマを追究する学習活動である。当然、各教科等との関連を図るべき特質を持っており、そこにはカリキュラム・マネジメントの考え方が本質的に含まれている。したがって、あえて新しい方法を発掘し、今までにない総合的な学習の時間を構想するというよりも、総合的な学習の時間の本来的な在り方を踏まえ、それをより効果的な学びの場とするための工夫を考えていくことが大事なのではないかと考える。

そこで、学校におけるこれまでの取組みを改めて見直し、総合的な学習の時間の学習の基本である生徒の主体性を重視するとともに、生徒が本気になって探究し、自己の生き方を考えていくことができる学習を実現するために、どのような指導のあり方が求められるのか考えてみたい。

(2) 総合的な学習の時間と特別活動との関連

総合的な学習の時間は平成10年度の学習指導要領の改訂によって創設されたが、創設当初より、学校現場では様々な取組が工夫され、理科や社会科などの教科や特別活動などとの関連について様々な議論がなされてきた。

ここで注目したい特別活動とは、小・中・高等学校の教育課程に位置付けられた教科外の教育活動であり、学習指導要領において目標や内容等が定められている。

内容としては、学級活動（小・中）ホームルーム活動（高）、児童会活動（小）生徒会活動（中・高）、クラブ活動（小のみ）、学校行事で構成されている。授業時数は学級活動（ホームルーム活動）が年間35単位時間で、他は年間、学期ごと、月ごとなどに適切な授業時数を充てるよう定められている。各内容とも集団活動を特質とし、主として自主性や社会性を育む教育活動であると言える。

このような特別活動の内容の中で、特に学校行事との関連については、取り扱う課題、体験活動、協働的な活動などの面で関連する部分が多いことから、ひときわ議論のテーマに上ることが多かった。

例えば、修学旅行の中で行われていた自然や歴史・文化に直接触れる体験的な学習を総合的な学習の時間の探究活動と位置付け、大きな単元として構成するなどのアイディアが検討された。

また、中学校で進路指導の一環として実施されていた職場体験についても、職業調べや自己の適性調べなどの活動と合わせて単元化し、進路と自分の生き方を考える探究活動にする取り組みも行われてきた。

そのような関連付けについては現在も引き続き取り組まれており、他教科も含めて効果的な組み合わせと順序性を考えた単元構成が工夫されている。それは、生徒の思考の流れに沿った追究活動を展開していく工夫の一つと言うことができ、有意義な学習活動を実現するための手立てとなることが期待できる。

山口満は、「総合的な学習の時間と特別活動の関係について考えていく場合、それぞれが独自のねらいと目標を追求すると同時に、相互補完的、相互還流的な関係のあり方を各学校で模索する必要がある。」とし、さらに、「両者の違いにこだわって相互関係を考慮しなければ、それぞれの活動が貧しいものになる。」[6)]と述べている。この考え方は、特別活動に限らず、他教科等との関係においても共有されている認識だと言っていいだろう。

したがって、上に紹介した二つの事例のように関連づける場合には、それぞれのねらいを明確にし、それが達成されるという前提で指導計画を立案しなくてはならない。つまり、それまで実施していた学校行事をそのまま総合的な学習の時間としてカウントすることはあり得ないということである。しかしながら、創設以来20年経っても、いまだにそのような事例が見られるとの指摘もあり、学校間格差が窺えるところでも

ある。[7)]

なお、前回の改訂版に引き続き、今回の学習指導要領においても、総則の中に「総合的な学習の時間における学習活動により、特別活動の学校行事に掲げる各行事の実施と同様の成果が期待できる場合においては、総合的な学習の時間における学習活動をもって相当する特別活動の学校行事に掲げる各行事の実施に替えることができる。」[8)]と規定されている。その場合も、それぞれの特質を踏まえて、「安易に流用して実施することを許容しているものではない」ことが明記されていることを確認しておく必要がある。[9)]

カリキュラム・マネジメントを進める際に、このような関連づけの留意点を踏まえ、相互補完的、相互還流的な関連づけを行うことで、それぞれの教科等の特質を生かしながら、教育課程全体で生み出す教育効果を高めることができるのではないかと考える。

以上述べてきたことを基に、カリキュラム・マネジメントを視野に入れて、特別活動との関連を図った総合的な学習の時間の工夫改善についての研究授業の成果を分析することで総合的な学習の時間の可能性を導き出したい。

２ 「う米売プロジェクト」の課題と方法

（1）Ｙ中学校の教育課題

北九州市立Ｙ中学校は、市内南西部に位置する小規模校（生徒数161名）であり、学級数は各学年２クラス（含、特別支援学級２）である。

Ｙ中学校（特に第３学年）では、この研究を始めるに当たって二つのことを課題として捉えていた。

一つ目は、生徒の自尊感情が低く、人間関係づくりが不得手で、挑戦意欲に乏しいといった傾向が全体的に見られたため、これをどのように改善していけばよいかという課題。

二つ目は、総合的な学習の時間の研究委嘱を受けたこともあり、活性化しているとは言い難かった総合的な学習の時間の学習活動を、いかに生徒主体の探究活動に変えていくかという課題、この二つである。

まず一つ目の課題については、以下のデータが教職員の課題意識の根拠になっている。

平成29年度の全国学力学習状況調査の生徒質問紙の回答結果を見ると、「自分にはよいところがありますか」という問いに対する肯定的回答は60%にとどまっている。これは、全国平均、県平均と比べて約10ポイント低い結果だった。

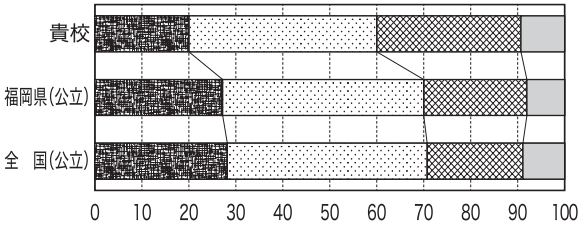

図１　生徒質問紙の回答結果の比較①

また、同年に第３学年以外の生徒を対象に実施した北九州市独自の学力・学習状況調査においても「あなたには良いところがあると思いますか」の質問に対して、当時第１学年だった第３学年（分析対象学年）生徒の中で「そう思う」「だいたいそう思う」と肯定的に答えた生徒は62%であり、これも市の平均と比較して下回っていた。

また、「難しいことでも、失敗を恐れないで挑戦していますか」との質問に対して、肯定的に回答した割合は73%であり、これも市の平均より約７ポイント下回っていた。

これらのことから、自尊感情や挑戦意欲の低さについては、学校としての教育的な課題と考えざるを得なかった。

次に、二つ目の課題についても、同調査の結果が基になっている。

生徒質問紙にあった総合的な学習の時間に関する「自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいると思いますか」という問いに対する肯定的回答は64%だった。

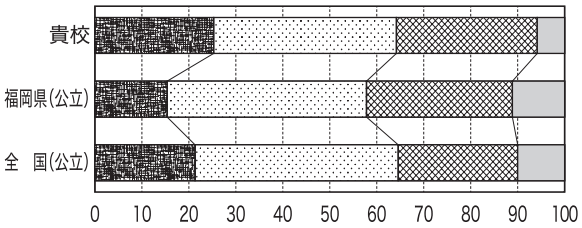

図２　生徒質問紙の回答結果の比較②

この結果は、全国平均と同程度の結果ではあるが、約３分の１の生徒が否定的な回答をしているということであり、やはり、総合的な学習の時間において主体的な探究活動が十分に実践されているとは言い難いと考えられた。

このようなデータを踏まえつつ、各教員が日常観察してきた生徒の実態を分析した結果、「人間関係形成能力」「自尊感情」「チャレンジ精神」に視点を絞り、指導改善を図ることになった。

学校教育目標「感謝の心をもち、希望する進路実現に向けて、努力を続けることのできる生徒の育成」の実現を目指し、総合的な学習の時間の目標を次のように設定している。

○　探究的な学習の過程において、課題解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題を自覚し、探究的な学習の楽しさを知ることができるようにする。
○　実社会や実生活の中から問いを見出し、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。
○　地域や社会で生きる人々に学び、進路を切り開く活動に取り組ませる中で、自己を理解し、人間力を高め、将来の生き方を考えることができるようにする。

以上、Y中学校が研究のきっかけとしたことなどについて概観してみたが、まずは生徒の実態を基に、そこから見えてきた課題を整理し、研究が始められたことがわかる。

例えば、学校教育目標「感謝の心をもち、希望する進路実現に向けて、努力を続けることのできる生徒の育成」からは、「相手意識」「他者との関わり」「自己理解・自己尊重」「目標をもって生活する態度」「計画性や向上心」など、いくつかの言葉が連想されるが、これらは第3学年が指導改善の視点にした「人間関係形成能力」「自尊感情」「チャレンジ精神」とも重なる。

総合的な学習の時間が教育課程の中核として、学校教育目標の実現に直結する役目を担っていることを考えると、生徒の実態把握によって明らかになった課題意識が学校教育目標に反映され、総合的な学習の時間の実践の視点とも連動していることは重要なポイントである。

このことは、学習指導要領総則第1章第1の4に、カリキュラム･マネジメントの一つ目の側面として「各学校においては，生徒や学校，地域の実態を適切に把握し，教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと」と明示されていることとも符合する。

その意味で、Y中学校が根拠と目的を明確にして実践を始めたことは評価できる。

(2) 授業計画の理論的検討

Y中学校では上記の課題解決を図るために、単元「う米売プロジェクト」の取組みにおいて二つのアイディアを考えた。

一つ目は、毎年、学校行事として取り組んでいた「稲作体験（米作り）」と関連を図る。

二つ目は、起業家教育（アントレプレナーシップ）の手法を取り入れる、ということだった。

【アイディア１：特別活動（学校行事）「稲作体験（米づくり）」との関連】

Y中学校では、平成11年度から、特色ある学校づくりの一環として、近隣の農園を借用し全校生徒で「稲作体験（米作り）」に取り組んできた。

この目的は、本物の体験を通して勤労生産の喜びを味わい、働くことの意義や価値について考えることができ、生徒一人一人の職業観の育成に役立てる。そして、協働で活動することや地域との関わりの大切さを自覚し、郷土愛を育むようにすることである。

例年、代掻きから稲刈りまで一連の活動を経て、収穫した米で餅を作って食べたり、それらを地域の高齢者に配ったりする取り組みを行ってきている。この特色ある学校行事を、効果的に総合的な学習の時間に結びつけることができれば、キャリア教育の面からより大きな効果を生み出すことができるのではないかと考えた。

【アイディア２：起業家教育（アントレプレナーシップ）の手法の活用】

もう一つのアイディアとして考えられたことは、総合的な学習の時間に起業家教育（アントレプレナーシップ）の手法を取り入れ、より一層生徒の主体的な探究活動を促し、その過程で、生徒の自尊感情や挑戦意欲の高揚を図ることができるのではないかというものであった。

以上二つのアイディアは、一方がこれまで蓄積された方法を生かす工夫、もう一方が新たな方法を取り入れる工夫になっている。

「稲作体験（米作り）」は地域と連携しながらの取組であり、カリキュラム・マネジメントの三つ目の側面である「教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと」に関係している。これまで培われてきたノウハウが活用でき、指導体制も円滑に機能することが期待できる。

また、もう一方の「起業家教育」は、実社会における経済活動をテーマとする学習を通して「生きる力」を育む教育であり、「会社の設立」「販売体験」「決算活動」などを擬似的に体験する中で、起業家精神といわれる「チャレンジ精神」や「創造性」等を養うこと

や自分の将来の「生き方」を考えるきっかけとすることを主な目的としたもので「生活の中から社会への自立を目指す学び」とも言われており、[10] この学習活動を継続することで、発想力・創造力・問題発見＆解決能力・情報収集＆分析能力・チームワーク力・リーダーシップ＆サポーターシップ・コミュニケーション能力等を向上させることができると言われている。[11] そのため、Y中学校が目指そうとしている、生徒が主体的に取り組む総合的な学習の時間の改善に役立つことが期待できる。

また、起業家教育の活動過程は、下の図のように、総合的な学習の時間の問題解決の学習過程である「日常生活や社会に目を向けた時に湧き上がってくる疑問や関心に基づいて、自ら課題を見付け、そこにある具体的な問題について情報を収集し、その情報を整理・分析したり、知識や技能に結び付けたり、考えを出し合ったりしながら問題の解決に取り組み、明らかになった考えや意見などをまとめ・表現し、そこからまた新たな課題を見付け、更なる問題の解決を始めるといった学習活動を発展的に繰り返していく」[12] というものとも重ねることが可能である。

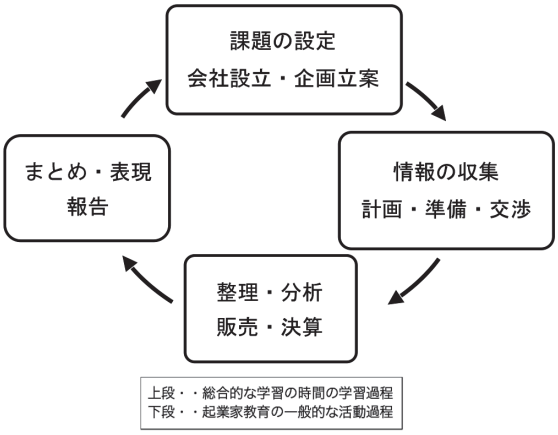

図３　起業家教育の活動過程との関係

したがって、起業家教育の手法に則って活動を進めていくことが、結果的に総合的な学習の時間の探究活動の充実に効果をもたらすことも期待できそうである。

３ 「う米売プロジェクト」の実施

（1）授業の構成と実践

この単元は、第２学年で行った勤労生産・奉仕的行事「稲作体験（米作り）」と関連づけ、実社会で働くことを想定した「職業や自己の将来に関する課題」として扱うものである。したがって、第２学年次に栽培し収穫した米を活用した後、余らせた半分の米を販売するという、第３学年次の１学期にまでまたがる長期の取組みとなっている。

単元名については、単元オリエンテーションの後、生徒にネーミングの募集を行い、投票によって決められた。名前の由来は「おいしいよ」という意味を地元の方言で「美味いばい」と言うことから命名されたという。

【単元のねらい】

1　自分たちのアイディアで利益を上げるという共通の目標を定めることで、自ら課題を見つけ、活動を進める中で課題解決の方法（力）を身に付ける。
2　営業活動や対面販売をすることで、地域の方々との交流を通して、コミュニケーション力や対人スキルを身に付ける。
3　販売後、活動を振り返り、よかった点、問題となった点を考え、その原因を追究、考察し、自ら考え、情報をまとめ、解決し、よりよいものへとつなげていこうとする力を身に付ける。
4　会社立ち上げから、企画、マーケティング、経理（借り入れ金や必要経費）、デザイン、営業活動など自分たちで行い、人生を切り開くチャレンジ精神や困難を乗り越えていくたくましさ、積極性を身に付ける。
5　実体験をすることで、社会のしくみを知るとともに、よりよい勤労観を身に付ける。

【各活動の概要】

①　会社設立（組織づくり）
　生徒が会社を設立し、全員がいずれかの会社に所属する。そして、会社の中で役割分担を行い、担当を決める。社長は、メンバーの個性や特徴を踏まえ、各部署の役割分担を計画し、本人と交渉しながら決定していった。

②　会社（部署）ごとの活動計画づくり
　販売に伴う部署ごとの業務を洗い出し、それぞれの計画を作成していった。アドバイザー（農産物の販売などを手掛けている起業家）による講習会に参加し、販売の方法などについて学習していった。

③　中間発表会（アドバイザーによる助言）
　各部署で計画したものを発表し合い、それに対

してアドバイザーから販売の工夫や留意点などについて助言を受けた。生徒は、アドバイザーの助言を参考に、計画を修正していった。

④　計画修正及び準備

パッケージやチラシの作成、販売店側との交渉など、各担当ごとに進めていった。

⑤　販売活動

訪問販売や店頭販売（大型ショッピングモール、地元スーパー、八百屋、コンビニ）を実施した。

⑥　最終報告会

活動報告、決算報告などのプレゼンテーションを行った。その後、売上金を公共機関へ寄付した。

なお、売上総額は78,730円で、北九州市役所やユニセフを通じて全額寄付された。

（2）生徒の反応

【生徒質問紙調査の結果から】

この単元の実践期間中に実施された平成31年（令和元年）度の全国学力学習状況調査の生徒質問紙の中に総合的な学習の時間に関する質問項目がある。

> Q．総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいると思いますか。

これに対して、「そう思う」「だいたいそう思う」と肯定的に答えた生徒の割合は82％だった。これは全国平均62％を約20ポイント上回っている。

ちなみに、これまでのＹ中学校歴代の３年生の回答結果と比べても、約20ポイント上回っているという。

また、自尊感情に関する質問項目

> Q．自分にはよいところがありますか。

に対しては、同じく肯定的回答は84％であり、同じく全国平均74％を10ポイント上回っている。

ちなみに、これまでのＹ中学校歴代の３年生の肯定的回答の割合は、平成29年度が62％、平成30年度が70％であり、これらと比べても今年度の生徒が大きく上回っている。

さらに、

> Q．難しいことでも、失敗を恐れないで挑戦していますか。

については、肯定的な評価の割合が76％であり、全国平均の70％よりも若干高くなっている。

この結果もやはり平成29年度の73％、平成30年度の68％と比較しても上回っている。

このような生徒質問紙で、しかも、調査時期が単元の途中という段階で詳しく成果が把握できるとは思えないが、少なくとも事前の調査結果との比較によって成果の一端をうかがい知ることはできる。今回の調査結果を見ると、同校が過去に実施した結果から大きく向上していると同時に、全国平均と比較しても大きく上回っていることから、実践の成果は大きかったと判断していいだろう。特に、総合的な学習の時間への取組に関する調査結果が、同校の過去調査結果及び全国平均と比べて、共に20ポイントも上回っている点は注目に値すると考える。

【生徒の振り返りから】

次に、単元終了後の生徒の振り返りカード（作文）を見てみる。

最終報告会を終えた直後の感想に次のようなものがある。

> ・会社全員が協力して活動でき、最後によい集大成を見せることができたと思う。他のどの会社も黒字、赤字はあったとは思うが、３年生全員が商売の大変さや地域のあたたかさ、また、友達のよい一面などを知ることができ、大きな達成感を得られたこのプロジェクトはもう一生体験することのできない大切な経験、思い出になった。
> ・みんなでお米を売ろうと同じ目標に向かって、毎日頑張って、無事すべて売り切れただけで、貴重な体験だったと思う。
> ・会社の人たちとのチームワークを高めることができたと思う。
> ・友達の意外な一面を見ることができた。

最後までやり遂げることができた達成感をもつとともに、友だちのよさや仲間意識の大切さなどに気づいたことが伝わってくる。

また、このプロジェクトを通して身に付けることができた力に関して、次のように自己評価している。

> ・自分は、相手とのコミュニケーションが苦手だった。しかし、今回のう米売プロジェクトで、お客さんと話す機会が多くあり、自分で勇気を出してチラシ配りをすると、お客さん

ともコミュニケーションをとることをできるようになった。
・丁寧な言葉でコミュニケーションをとれるようになったと思う。目上の人に何かお願いをするときの言葉もわかった。
・もし自分が買う立場だったら？と、お客さんの気持ちになって考えることができるようになったと思う。
・知らない人にも声をかける勇気とコミュニケーション力、臨機応変に対応（する力を身に付けることが）できた。
・先を見据えて計画を立てて行動していく力が身に付いた。
・頭でシミュレーションする力（が身に付いた）。

非常に多くの生徒が、相手意識をもつことの大切さを含めて「コミュニケーション力」の向上を自覚していることがわかる。また、計画性が重要であることについても実感している。

他方、不足していた力（今後身に付けていきたい力）として自覚しているのは、

・交渉する力が自分にはそれなりにあることを知った。反対に、しゃべる（話す）能力や行動力、様々な対応方法を考える力が低かったように思う。
・足りなかったことは大人の人との会話力。
・私の伝達ミスで会社に大きな迷惑を与えたので、ちゃんと『伝える力』というのを身に付けたいと思った。
・リーダーシップがとれるようになりたい。

など、やはりコミュニケーション力に関するものが多く、成果を自覚したと同時にさらなる必要性も感じていることがわかる。

また、今回の経験が今後の自己の生活にどのように生かしていきたいかを「チャレンジしたいこと」として尋ねると、多かった順に「コミュニケーションの力を高めるなど人間関係に関する内容」を挙げた生徒が12名、「販売活動に関する内容」を挙げた生徒が11名、「進路や教科の学習に関する内容」を挙げた生徒が6名、「生徒会活動や実行委員会に関する内容」を挙げた生徒が3名となっている。（いずれも43名中）

この結果を見ると、比較的多くの生徒が、今回の学習で学んだことを自己の日常生活や進路に生かしていきたいと考えていることがわかる。

そして、「働くこと」について次のような感想もあった。

・あんなに暑い中頑張ったのに、時給19円という利益がとても少なくて悲しくなった。働くということは自分が思っていた以上に大変だった。

このような趣旨の感想は、多くの生徒から出されていた。このような感想が多かったのは、実際に金銭を伴う体験をすることができたからである。中には、その実感を基にして「働くことは『一緒に働く仲間と意思疎通をしながら、先を見通して最善の手を尽くし、その時間を大切にすること』ではないかと思う」と、働くことを概念的に捉えようとした生徒もいた。このような生徒の存在も一つの成果の表れと捉えることができる。

以上、生徒の振り返りカードの主な内容を見てきたが、この研究実践を開始する際に挙げられていた「人間関係形成能力」「チャレンジ精神」「自尊感情」の視点にかかわる感想も多く、その点で成果があったことが窺える。このような生徒自身による成長の捉えについては、実社会をフィールドにした探究活動を進める過程で、生徒間交流や職業人との交流、地域の人々や消費者との交流が大きく影響していると推測できるのではないだろうか。

４「う米売プロジェクト」の成果

（1）特別活動との相乗効果

この実践の特徴は、学校行事としての稲作体験を、収穫した米で餅をつき、地域の方々に振る舞うというところで一旦終了し、それまでの活動の趣旨と目的を達成しながら、余らせた米をいかに販売するかという課題意識をもたせて総合的な学習の時間の学習に繋げている点にある。決して販売のために米を作ったのではなく、これまでの先輩たちが実施してきたように、地域の方々に喜んでももらえるように餅を振る舞うことを一義的な目的として取り組み、自らの労働によって米を収穫し、美味しく食べることができ、多くの人にも喜んでもらえた。そのような自尊感情を育むことにつながっている。これまでの生徒はここまでしかしていない。

ところが、今回の実践では、教師側が意図的に「米

が余る」という状況を作り、生徒に提示するという仕掛けによって課題意識をもたせる。販売しようとするのは自分たちが長い時間をかけ育て収穫した米なのである。単なる何かではなく、いわば「自分たちの米」なのである。そこに生徒の課題意識を分断させない工夫があると言っていいだろう。

このような学校行事としてのねらいを明確にした上で活動を完結させ、その活動を生かして発展的に新たな課題意識をもたせ、総合的な学習の時間の取組を開始するという展開は、効果的に関連が図られた好例と言えるだろう。

（2）起業家教育（アントレプレナーシップ）活用の効果

生徒の主体性を高めるために導入した起業家教育（アントレプレナーシップ）の手法は、生徒の意識を実社会に近づけ、主体的に活動する意欲と態度の育成に効果があり、働くことの困難さと喜びを味わうことに役立った。

上述した「あんなに暑い中頑張ったのに、時給19円という利益がとても少なくて悲しくなった。働くということは自分が思っていた以上に大変だった」という率直な生徒の感想は、この効果の一つの表れと言えるだろう。

消費者としての立場ではなく、販売する立場で経済活動にかかわる体験は、当然全員が初めてであり、そこに興味関心が高まったであろうことは容易に想像できる。そして、実際に会社を設立し、全員が社員として担当する業務に取り組みながら、収益を上げるために努力するという営みは、生徒たちが主体的にならざるを得ない状況を創出することになったと言ってよいだろう。その意味で、十分に効果があったと評価できる。

○おわりに

最後に、Y中学校の実践研究を踏まえながら、今後、総合的な学習の時間が生徒の主体的な探究活動として活性化するために、特別活動との関連の視点で若干の提案をしてみたい。

（1）自発的、自治的な活動との関連

特別活動との関連を図る場合に、先に述べたような内容面での関連と併せて、特別活動で培った資質能力との関連についても意識したい。特に、学級活動や生徒会活動で重視される「自発的、自治的な活動」を通して育成される資質能力を総合的な学習の時間で生かすということである。

例えば、生徒会活動の活動過程は一般的に「問題の発見･確認、議題の設定」「解決に向けての話合い」「解決方法の決定」「決めたことの実践」「振り返り」といった過程になることが多い[13]が、それぞれの段階は総合的な学習の時間の探究のプロセスと関係付けることが可能である。

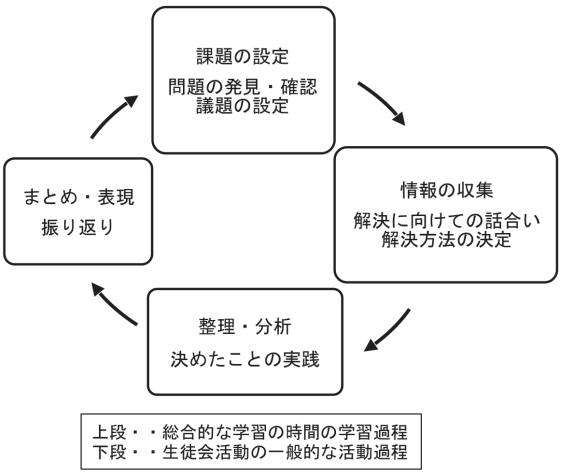

図４　生徒会活動の活動過程との関係

この中で、特に、議題の設定から解決方法の決定に至る過程では「話し合い」の技能が強く求められる。話し合いの充実なしには、よりよい適切な合意形成を実現することはできない。浅薄な話し合いによる合意形成では、生徒全員が納得した上で、全員が主体的に活動していく意欲をもつには至らないはずである。

一方、総合的な学習の時間においては、情報の収集や整理・分析の過程で、話合いを中心にした協働的な学習の充実が重要な鍵となる。つまり、特別活動、総合的な学習の時間双方において、話し合い活動の充実は欠かせない。したがって、集団活動を特質とした特別活動の話合いの経験は、総合的な学習の時間での協働的な学習でも生きることが期待できることから、総合的な学習の時間の指導計画を作成する場合、特別活動における自発的、自治的な活動での経験を加味し、特に話し合いの技能や態度に関する関連を踏まえることは重視しておきたい点である。

この場合、両者は相互還流的な関係にあると言えるので、それぞれで育成された資質能力が相互に作用し合うことが起こり、そのことによって教育課程全体の機能を高めることになることも期待される。まさに、

カリキュラム・マネジメントの目指すことと一致すると言っていい。

（2）キャリア教育としての相互関連

今回分析対象として取り上げた実践は、キャリア教育の範疇に位置付けられる内容である。

キャリア教育については、学習指導要領総則において「生徒が学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること。」と明記されている。[14)]

総則の解説によると、これまでキャリア教育の理念は各学校において浸透してきているものの、学校の教育活動全体で行うとされてきた意図が十分に理解されず、指導場面が曖昧で、しかも、依然として狭義の進路指導と混同され、「働くこと」の現実や必要な資質・能力の育成につなげていく指導が軽視されていたりするのではないかといった指摘もあり、「キャリア教育を効果的に展開していくためには、特別活動の学級活動を要としながら、総合的な学習の時間や学校行事、道徳科や各教科における学習、個別指導としての教育相談等の機会を生かしつつ、学校の教育活動全体を通じて必要な資質・能力の育成を図っていく取組が重要になる」とある。[15)]

ここで示されている「学級活動を要とする」ということと関わって、学級活動の内容（3）に「一人一人のキャリア形成と自己実現」が新たに加わり、その指導の際の留意点として、「学校教育全体で進めるキャリア教育の要としての役割を担うことを位置付けた趣旨を踏まえる」「小・中・高等学校のつながりを考慮する」ことが挙げられている。[16)] そして、キャリア教育が教育活動全体の中で基礎的・汎用的能力を育むものであることから、職場体験活動などの固定的な活動だけに終わらないようにすることが大切であると述べられている。

このことを踏まえると、総合的な学習の時間における「職業や自己の将来に関する課題」として取り組んだ単元「う米売プロジェクト」も学校行事として取り組んだ「稲作体験（米作り）」も、キャリア教育の内容として位置付けられる以上、その要である学級活動との関連を明確にしておく必要がある。

例えば、総合的な学習の時間での探究活動を通してつかんだ「働く意義」や「自己理解」などの自己の生き方に関わるテーマを学級活動の題材として学習することで、総合的な学習での学びがさらに深化し、生徒一人一人の生き方に有効に働く資質能力の育成を図ることが期待できる。したがって、総合的な学習の時間において、今回のような「職業や自己の将来に関する課題」を探究していく場合には、指導計画を作成する際に特別活動（学級活動）との関連を明確にしておくことが重要であると考える。これもカリキュラム・マネジメントの一つの姿と言えるだろう。

（3）特別活動との関連の可能性

総合的な学習の時間の理念が教育課程全体に広がったと言われる今回の学習指導要領の改訂では、学校教育目標の達成に向けて、いわば総力戦で挑む姿勢でカリキュラムを編成することが求められている。その主軸とも言える総合的な学習の時間の充実を図る上で、その基盤づくりともなり得る特別活動との関連については、各教科との関連以上に重視すべきであると改めて考えることができた。

今回は、内容面での関連、話し合いの技能・態度面での関連について考えてみたが、それ以外にも、集団性や人間関係、社会参画、自己実現など、特別活動にとって重要な視点での関連も考えられると思う。

いかに生徒が主体的に探究活動に取り組み、汎用的な資質能力を育んでいく総合的な学習の時間を生み出せるか、今後もカリキュラム・マネジメントの観点に立って研究を進めていきたい。

【引用文献】

1）文部科学省：中学校学習指導要領解説総則編　第１章　１(1)、東山書房、2018

2）文部科学省：中学校学習指導要領解説総則編　第１章　１(2) ④、東山書房、2018

3）北九州市立八児中学校：令和元年度北九州市教育委員会委嘱「教科等コアスクール事業（総合的な学習の時間）『生きる力をはぐくむ総合的な学習の時間の指導の充実～探究的で協働的な学習を通して～』、2020

4）文部科学省：中学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編　第１章　２(2) ②、東山書房、2018

5）文部科学省：中学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編　第４章　１(2)、東山書房、2018

6）山口　満編:新版　特別活動と人間形成　P.103、学文社、2006

7）文部科学省：生活・総合的な学習の時間ワーキンググループ資料７『総合的な学習の時間について』、教育課程部

会、2016
8）文部科学省：中学校学習指導要領解説総則編　第１章　2　3 (2) エ、東山書房、2018
9）文部科学省：中学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編　第４章　1 (4)、東山書房、2018
10）「みやぎのキャリア教育推進のために」P51、宮城県教育研修センター、2004
11）特定非営利活動法人「アントレプレナーシップ開発センター」ホームページより http://www.entreplanet.org
12）文部科学省：中学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編　第２章　第２節　1 (1)、東山書房、2018
13）文部科学省：中学校学習指導要領解説特別活動編　第３章　第２節　1、東山書房、2018
14）文部科学省：中学校学習指導要領　第１章総則　第４　1 (3)
15. 16）文部科学省：中学校学習指導要領解説総則編　第３章　第４節　1 (3)、東山書房、2018

【参考文献】

・北九州市立八児中学校：令和元年度北九州市教育委員会委嘱「教科等コアスクール事業(総合的な学習の時間)『生きる力をはぐくむ総合的な学習の時間の指導の充実～探究的で協働的な学習を通して～』、2020
・児島邦宏・村川雅弘編：中学校　ウェビングによる総合的な学習　実践ガイド、教育出版、2001
・上西好悦：小・中学校　キャリア教育を支えるアトレプレナー教育、日本標準、2006
・月刊「特別活動研究」10 月号　NO、394、明治図書、1999
・村川雅弘編：学力向上・授業改善・学校改革　カリマネ 100 の処方、教育開発研究所、2018
・北九州市教育委員会：総合的な学習の時間の手引、平成 13 年
・久我周夫：「総合的な学習の時間」の課題と改善についての検討ー授業を受けてきた側の調査から見えてきたもの一、大阪夕陽丘学園短期大学紀要第 60 号、2017
・森和弘、中野伸彦：特別活動と総合的な学習の時間、長崎ウエスレヤン大学現代社会学部紀要 17 巻１号、2019

A Consideration on the Relationship between the Period for Integrated Studies and Extra-Curricular Activities

Masami Oba *

＜Abstract＞

Curriculum management is one of the keywords for this revised course of study. It was clarified that the Period for Integrated Studies has a critical role in education. Based on the Period for Integrated Studies' practical tasks of the past 20 years since its foundation, it is necessary to improve teaching methods so that students can once more be independent in their learning. In this paper, keeping the idea of curriculum management in mind, we will focus on its relationship with extra-curricular activities based on specific practical examples. While primarily considering and evaluating school events and career education, we also propose ways of thinking and teaching methods for further enhancement. Improving extra-curricular activities so as to create the Period for Integrated Studies experience that is meaningful to students is essential. The relationship between the Period for Integrated Studies and extra-curricular activities should be further emphasized in order to enhance the power of the curriculum as a whole, and to develop the qualifications necessary for students who will live in an "era that is difficult to predict" in the future.

Keywords: curriculum management, career education, labor production and service events, entrepreneurship education, student council activities

* Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare, Seinan Jo Gakuin University, Part-time teacher